



Title	デヴィッド・A・ジョプリング「哲学カウンセリング：真理と自己解釈」
Author(s)	徳永, 哲也
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 69-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81744
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デヴィット・A・ジョプリング

「哲学カウンセリング ― 真理と自己解釈」

David A. Jopling, Philosophical Counselling, Truth and Self-Interpretation, in *Journal of Applied Philosophy*, Vol.13, No.3, 1996.

要約紹介：徳永哲也

序　哲学カウンセリングの根本となる前提は、普通の人の人生諸問題は哲学的コンテキストの中で語るのが有意義だという考えである。この目的に向かって、哲学カウンセラーはクライアント（カウンセリングを受ける人）と一緒に哲学するように応対し、そこでの関心事は、職業選択、人生の意味に関する実存的問いなど様々な問題に及ぶ。

二、三の核心となる哲学的問題の議論に的を絞るために、ここでは二人の有名な哲学カウンセラー、ゲルト・アーヘンバッハとラン・ラハヴの取り組みについて論じることにしよう。両者ともまずはある種の患者が直面する「根本的で実践的な問い」に関心を向ける。すなわちその表出と解決が人生の営み方にとって重要である哲学的問い、「私は誰か」「私は本当のところこの人生で何をしたいのか」「私にとって何が一番重要か」「私はどうになりたいのか」というような問いに、である。

哲学カウンセリングがこうした問いに対処するということだけでは、それは治療とは呼べない(とアーヘンバッハとラハヴは主張する)。哲学カウンセリングが他と違うのは、正常や自己実現や精神的健康や心理的安寧といったことに関する既成の規範的理念に支配されるのを拒否している点である。実際、こうした理念そのものを問い直すことがカウンセリングの目標の一つになっている。クライアントと一緒に哲学することが、忠告を与えることや診断的な原因究明の対応を含まないとすれば、そして心理学的規範理念に向かう舵取がなされないとすれば、そこにはどんな効用があるのか。アーヘンバッハとラハヴによると、その効用はクライアントがより自分に忠実に自律的に考えるようになる手助けをすることにあるらしい。問題の解決を見つける方向にというよりも、根本的実践的問いに正面から取り組む中で哲学的洞察と自己知を深める方向に舵取がなされるというのである。

さて、カウンセラーがクライアントの問いに対して答えを用意してあげるという

関わり方はしないとすれば、より深い自己知にはどうやって到達するのだろうか。哲学カウンセリングが努めるのは、クライアントがその信念、想定、道徳見解、実践的推論方法、さらには世界観や内なる根本理念を規範的哲学的基準に沿って探究し評価できるようになる上で使いやすい土俵を準備してやることである。その土俵が使いやすいのは、クライアントが自分の観点で自分のペースで問題に取り組むための自由裁量の余地をかなり与えられているからである。

ラハヴとアーヘンバッハの論ではこうなる。哲学カウンセラーのこのプロセスへの介入は、助産婦の仕事のように最小限のものにとどまる。まずは、哲学者が深遠な専門的問題（例えば解釈学的理解、現象学的記述）に対処する際に用いる道具をクライアントとの場に出すことと、それによってクライアントに自分の問いをより深く明瞭に輪郭づける手段を与えることである。次に、クライアントが反省的自己評価を行う重要な段階ごとにしっかりした哲学的問いを立ててやることである。この間ずっとカウンセラーは、判断留保的な、道徳留保的でさえある立場を維持することとする。

しかし、哲学カウンセラーは「自己知」という言葉で正確には何を意味しているのだろうか。反省的自己探求がテーマとする自己とは何だろうか。このプロセスで真理は重要性をもつのだろうか。また、クライアントが哲学的道具を与えられた場合、小賢い哲学に満ち満ちた自己欺瞞を築き上げるような方向で、その道具の扱い方を間違ってしまうということも起こり得るのではないか。哲学的には未熟なクライアントに哲学的道具を差し出すことは、医学的知識のない患者に自己医療のためと称して強力な麻薬を与えることと同じくらい危険なのではないか。

本論稿ではこうした問題をいくつか追究するつもりである。私が擁護しようと思う主張の中心点は、自己理解という領域で真理と虚偽の区別を保持するためには、哲学カウンセリングは人格やアイデンティティや道徳に関する適切な哲学的心理学によって性格づけられる必要があるということ、そしてそれが最もうまく見つかるのは広く実在論に立った強固な道徳心理学の形においてであるということ、である。

本当のアイデンティティ 多種多様な自己知の中でも哲学カウンセリングに直接関わるものは道徳的で実践的な自己知である。ここで対象となるのは、道徳上の個性の持ち主と見なされうる、行為者としての自己である。カント的な区別を用いれば、これは理論悟性よりも実践理性の立場に立つときに、すなわち我々が自分自身を、自ら行為をなす者、個人的道徳性を発揮する者と見なすときに、言及する自

己である。

大ざっぱな議論から始めれば、実践的自己知とは、自分の最も底流にある信念、
抛り所、構想、価値観、理想と関連づけて反省的な自己探求と自己評価を心がけて
いる人が持っているような類の知である、と呼んでいいだろう。こうした心がけが
あれば、この人は、何が様々な特性や関心事の中で自分の最も中心にある重要なこ
とか、何に自分は最も深く心を向けているのか、何が自分の最大の目標であり理想
であり抛り所なのかについて、正当で行動指針となる理解を獲得していることにな
る、とも言えよう。この類の知は、与えられるものというよりは自分から到達して
いくものであり、それゆえすべてか無かの形よりは程度問題にならざるをえない。
というのも、自分が何者であるかは自分ではあまり分からないが、その分からなさ
程度までが変化するからである。つまり、我々は自分が何者かについて無知である
し、誤りや目隠しや欺瞞が入っているのである。

日常生活と哲学カウンセリングで自己知や自己無知や自己欺瞞の原因をいろいろ
探るときに前提になっているのは、自分の実像と自分で思っている像との区別、す
なわちいわゆる「本当のアイデンティティ」と「表象されたアイデンティティ」と
の区別である。

本当のアイデンティティがたいていの場合自分では分からない理由は、次に挙げ
る要因で説明できる。第一に、自己知に対して精神の力動的な厚い障壁があること
である。人はしばしば、自己の動機や自分の選好の基になっているものについて、
虚偽の主張をする（例えば認知を簡略に済ますために）。第二の要因はもっと単純
なものである。我々の最も底流にある信念や抛り所やアイデンティティ認識は、そ
れらを探究するときにこそ最も捉えがたいものとなり、最も幻想に呑み込まれやす
くなるのである。認知を簡略に済ますという観点からすると、我々にある因習的な
既成の自己概念の中で疑問も抱かずに暮らしている方が楽なのである。第三の、そ
して最も重要な要因は、我々の因習的な自己概念が、現実の自己の複合体、すなわ
ち自分は何者かを輪郭づけるような「核心的諸特性」の複雑で統合的で高度に動的
な複合体に照らして、あまりにも型にはまって単純化されている、ということであ
る。

表象されたアイデンティティ：自己概念とカウンセリング クライアントが初
めて哲学カウンセリングを受けるときに何が起こるか考えてみよう。彼らの第一歩
の試みは、認知的に中立な出発点から始められるわけではない。彼らは経験のある

種のカatalog、限られた認知能力、探究上の偏倚、解釈上の戦術にがんじがらめにされた自己概念を抱いている。

それでも、いかに不完全なものであれ、自己概念は我々が無駄を省いて認知を行うのに重要な任務を果たしている。自己概念は自己を見つめ表象する方法に形を与える発見装置になってくれる。すなわち、本当のアイデンティティのように複雑にできあがっているものについて考える方法を抽出し整序し組み立てるのに役立ってくれる。

自己概念は、自己という複雑で重層的な複合体をごく単純でごく少数の原型に還元するということ言えば、ある程度の単純化の範疇に入ってくるかもしれない。その極端化の一方が大きく歪んだ過度の単純化であり、他方が相対的適合性を保っておくことである。例えば我々は、一言か二言で自分の性格を述べるように言われると、豊富で雑多な情報を少数の言葉に圧縮してまとめねばならない。こうした簡潔でも適合性に劣る自己描写は、コンテキストを無視しており、力動性を欠いたものであり、うまく個性を描けていない。

クライアントは、哲学カウンセリングを受けに来る前に、自分の問題（例えば重要な職業選択）を過度に単純化した自己概念につなげて描いていることもある。彼女の自分に対する考え方が、その問題に関する彼女の重大な見解を形作る。もっと重要なこととして、その考え方が問題そのものの性質を形作る。彼女の自己概念が偏狭で習癖の殻にこもったものになっていたら、彼女はその問題の違った描き方にもつながったであろうような行動と表現の幅広い可能性から締め出されることになる。

哲学カウンセリングの目標の一つは、クライアントの習癖に支配された、過度に単純化され標準化された自己概念を問い直すことである。そのことが刺激となって、クライアントは「私は誰？」というような問いを、より深く発展した意味で追究するようになるのだが、それは固定化された社会的規範や因習的真理や自己概念にがんじがらめにされた状態を問い直すことによってなされるのである。

例えばアーヘンバッハは、哲学臨床（プラクシス）は隠れた想定や偏倚や信念に関して自己を問い直し続けるためになされる、と説明している。哲学的な問い直しの目標は、「正しくて決着がついていて確定的で疑いがないと自認しているあらゆるもの、要するに、『真』であると自認していてそれ以上の問い直しは一切廃棄しようとするあらゆるものに関して、哲学的懐疑を維持することである」。

これは哲学的問い直しの開かれた性質を正しく捉えているが、問い直しの過程を

主義としての懐疑の姿勢と混同する危険性がある。哲学カウンセリングの目標は、個人のアイデンティティや善なるものや善き生活や真理についての哲学的主張となるものに対して一種の不可知論的姿勢を維持するために、たんに問い直しのための問いを立てることなのだろうか。それとも何かあるもの、すなわち真理に接近するために問いを立てることなのだろうか。

反実在論、アイデンティティと真理 こうした疑問をさらに掘り下げてみよう。クライアントが「私は誰?」「私が人生ですることとは何?」といった根本的実践的問いに答えを出すとき、真理は重要になるのだろうか。こうした問いに対するクライアントの答えは、真か偽かとか客観的に見てより良いかより悪いかといった評価ができるものなのか。相対立する答えに合理的判定を下す独立した根拠はあるのか。あるいは、ある一つの答えが首尾一貫性ともっともらしさの最小限の基準を満たしている限り、それは他のどんな答えにも劣らないものだ、ということになってしまうのか。これらは哲学カウンセリングにとっては大切な問いである。というのも、これらは、クライアントの自律に価値を置くのか、それとも真理の追求に価値を置くのか、の両者の緊張関係を浮き彫りにしているからである。

ラハヴもアーヘンバッハもその著作で、クライアントの道徳的知的自律を尊重することが哲学カウンセリングを司る最も重要な要因であることを示唆している。そして彼らの見解では、これには介入を厳に慎むことが必要なのである。哲学者の役割は、パターンナリスティックにならず、たんにクライアントがその答えをそれ自体において検証する手助けをしてそうするための哲学的道具をクライアントに与えることだ、というわけである。

こうした仮説は二つの論理ステップから帰結するが、そのどちらも疑わしい。第一に、根本的実践的問いに自分の選んだやり方で答えを出すことはクライアント次第であるとひとたび認めてしまうと、出したいくつかの答えの中でどれが自分に最もふさわしいかを決定するのも自分次第だと考えるのは当然のように見える。

自律の名の下に解釈の自由裁量をひとたび認めてしまうと、規範論理の自由裁量がすぐその先のステップとして現れる。いくつかの答えから決定するための根拠や規範そのものについて決定するのも自分次第だと考えるのは当然のように見える。ラハヴの示唆するところによると、根本的実践的問いに答えを出す方法としてあるものが他のものより選好される唯一の理由は、それがより真であるとかより現実に近いということではなくて、それが方法で自分を表現しようとするクライアン

トの自律的選択を反映しているということなのである。

しかしなぜ、根本的実践的問いに答えを出すにあたって、真理性評価よりも個人的で実利的で美的な考量が優先するのだろうか。ラハヴは、これを理論的に正当化するのに広く反実在論的な形をとり、片やアーヘンバッハは懷疑主義的な形をとった。反実在論だと話は太ざっぱには次のようになる。

第一に、哲学カウンセリングにおける反省的自己探究の結果は、クライアントのそのときそのときの要求や関心や考究する流れの変化と共に変化する。根本的実践的問いに対して、何らかの出発点から必ずたどり着く答えなど、何一つありはしないのだ。

第二に、反省的自己探究をしているクライアントは、大量の雑多な証拠物件に直面していて、それを様々に解釈することも変更することも可能だと見ている。基礎的証拠となるものが一つの正しい自己解釈をはっきりと明確にする、というわけではない。むしろそれは、多数のもっともらしい自己解釈の選択肢を許し、そのどれ一つを取っても、他の選択肢より客観的に根拠づけられているわけではないのだ。

以上二点からすると、導かれるであろう結論は、哲学カウンセリングを受けるクライアントが根本的実践的問いに答えを出す過程に独自に枠をはめるような、事実に基づく決定的な核になるものは存在しない、ということである。哲学カウンセリングを受けるクライアントが期待できることはせいぜい、根本的実践的問いに答えを出す方法を首尾一貫した扱いやすいもっともらしいものにすることである。ある方法が本当に的を射ているとか他の方法より真理に近いかと尋ねても意味はない。それでも、本当のアイデンティティと表象されたアイデンティティとの区別が問いただされたとき、二つの問題が浮上してくる。

反実在論的哲学カウンセリングが直面する第一の問題はこうである。この考えでは、a)反省的自己探究の基礎的証拠となるものは、根本的実践的問いに対する他の多くの答えと両立するぐらい十分な順応性を持っており、b)これらの答えを判別する根拠は、真理性評価とは別の考量（例えば、直観的なもっともらしさや首尾一貫性や簡明さやふさわしさ）に限定される、ということになっている。これは哲学カウンセリングでなされる反省的自己探究の現象面の特徴のいくつかを捉えている。自己知すなわち本当のアイデンティティを獲得する経験的基礎は、どこまでも豊かで複雑なものである。自己同定すなわち本当のアイデンティティの描写と評価は本質的にどこまでも尽きないものだが、それは自分で描写していけば今以上に適切に捉えられるかもしれないものが常にどんどん出てくるからである。

第二の問題は、より深刻な実践的帰結を含んでいる。クライアントの自律を尊重することが、哲学カウンセリングの流れにおいて根本的実践的問いに答えを出すどの方法も他の方法以上の客観的保証を与えられはしないことを含意するなら、首尾一貫した偽なる(あるいは自己欺瞞の)陳述体系と首尾一貫した真なる陳述体系とを区別する根拠は見えにくくなってしまっているのではないか。

例えば、「私は誰で、本当のところ人生で何をしたいのか」という問いに答えを出すクライアントの方法が、哲学カウンセリングの場で、その真理性評価の観点からではなく表現性や内的首尾一貫性やもっともらしさや扱いやすさの観点から評定され批評されるとしたら、彼女は自分の当面の要求に合わせるのに最も道徳的に便利な自己解釈を引き出すこともありうる。

こう見ることもできるかもしれない。クライアントは、新たに得た哲学的道具と哲学カウンセリングの場で認められた解釈の自由裁量のおかげで、哲学的洞察ができるようになったと感じているのだ、と。だが実際できるようになったのだろうか。本当のアイデンティティと表象されたアイデンティティとの区別に妥当性があるなら、彼女は首尾一貫していてもっともらしくはあるが虚偽の(あるいは自己欺瞞の)自己解釈をしているのだ、と説明できる合理的根拠が出てくる。

こうした区別の効力を維持しようとするなら、哲学カウンセリングの流れの中でクライアントが根本的実践的問いに答えを出す方法は、彼女の恣意的な認識と規準論理と描写のやり方に基づいて組み立てるわけにはいかない。最も表に出ていて満足度が高く扱いやすく首尾一貫しているものに向けてではなく、真理に向けて噛み合わせていかねばならない。この主張は、哲学カウンセリングにおいて解釈の自由裁量をもつ意義を否定するものではない。しかし、それが乱用される可能性に注意を促し続けるものではある。クライアントの自律を尊重する代償として、自己欺瞞と自己幻想がはびこることもありうるのである。

哲学カウンセリングにおける真理 哲学カウンセリングにおいて真理がいかに重要かを知るために、カウンセラーがしばしば直面せねばならない場面を考えてみよう。クライアントが人生の岐路となる重大な決定をするにあたって迷っている。迷うのは、様々な方向へ向かおうとする感情や動機がいろいろ入り混じっているからだけではない。自分がまずい決定をすれば、例えば不正確な自己理解に基づく決定をすれば、失うものが大きいことを知っているからでもある。

ある新卒医師の事例を考えてみよう。彼女は発展途上国の平和部隊ボランティア

になろうか、それともアメリカ大都市の民間医院の若き共同経営者になろうか、と迷っている。自分は他人のために奉仕する理想主義的な人間だと思って、前者の道に進もうという気になる日もあれば、自分は出世して尊敬される専門職を目指すのだと思って、後者の道に進もうという気になる日もある。

彼女の迷いは、未来の自分の姿を別々のものにするような人生の二つの道の間での迷いだと説明されるかもしれない。どちらの場合でも彼女は病人を治療するわけだから、自分の人生に描いていた第一の目的のいくつかは実現することになる。しかし、彼女の第一の行動指針となった核心的な信念、構想、願望、自己理解などの複合体は様々な方向へ枝分かれしていくことになる。

彼女が自分の決定を、直観や当て推量といった非理性的な決定手続きに基づいて行おうとしたら、彼女の決定が成功する根拠は、ほとんど偶然的なものになる。彼女の入り混じった動機を構成する様々な要素を反省的に識別しないでなされる決定は、自己欺瞞や幻想や偏倚に浸されたままになる。こうした歪みにもっと抗する決定がなされていくには、その根拠がより一層の明証性と正当性と現実性をもたねばならない。

哲学カウンセラーは、クライアント自律の原則と非指示的カウンセリングの倫理に与するとすれば、どうやってクライアントを助けるのだろうか。第一には、クライアントの自己概念が彼女の苦悩の諸側面をいかに見え隠れさせているかを彼女自身が理解する手助けとして、彼女の問題を分析する様々な哲学的道具を差し出す。これによって自己意識が深まれば、決定に対処する新しい道が開けてくる。しかしカウンセラーは、彼女の個人的決定や信念や価値観に忠告や評定を振り向けることは控える。彼女が新たに獲得した自己理解を、本人がふさわしいと思っている自己の表現と評価の自律的選択として、カウンセラーは尊重するわけである。

ここで問題となるのは、自己概念が正確なものかそれとも不正確なものか（あるいは首尾一貫していて自己表現的ではあっても自己欺瞞的なものか）を区別する方法を、クライアントが与えられていないということである。

不正確な自己理解が結局は不適応となる例を考えてみよう。クライアントが自己のある側面のみを自分を表現し自分に役立つものとして焦点化して選び出しながら、それが他の側面といかに統合され彼女の行動をいかに性格づけるかは知らないままだとしたら、彼女のこれらの価値観に対する評価姿勢は、その心理や動機を現実支配するものを正確には反映していないかもしれない。彼女は、彼女の状況や道徳心理構成や能力と現実的な噛み合わせのない行動方針を空想し、推論することにな

る。

真理志向的な哲学カウンセラーと一緒に哲学することは、彼女の決定を少しも容易化してくれないだろうし、そこから彼女が習得するものは、彼女の自律的選択を満足のいく、扱いやすい、表現豊かなものにはくれないかもしれない。しかしそのことは、彼女がこぎれいな答えに迎合的ではなくなり、当て推量や社会的因習に基づく決定手続きに批判的になるという意味で、彼女を哲学的自己意識がもてるようにしてくれるだろう。

ここでの課題は、どの形の自己理解が真理に一番近いかを定めることであろう。クライアントとカウンセラーは、クライアントが関心を向けている様々なもののうちどれがより永続的な価値を有し、彼女が抱く二つの自己概念のうちどちらの側面が明証的であるのかについて、より明晰な認識に達するように、一緒に努めることになる。何が本当のところ彼女の初めの自己認識を構成しているのかについて、より真なる概念がもてれば、彼女は、しばしば陥りがちな情緒的なものによる判断ミスを洗い直すことができるだろう。

彼女が哲学カウンセラーと一緒に哲学する中で行う反省的自己評価は、「私は本当はどのようなもので何を望んでいるのか」という問いに向けられていく。ここでの目標は二層構造になっている。第一には、彼女の直接的な意向や願望や選好への意味付与となるような最も中心的で底流にある理想や拠り所や道徳感情や信念や価値観を確認し評価することであり、第二には、この理想や拠り所などの配置が分かったら、取りうる選択肢の中でどんな種類の人生が彼女にとって本当に最善なのかを決めることである。

哲学カウンセラーと話をすることは、彼女のアイデンティティの構成要素となる核信的信念や拠り所や理想や価値観の多くが人生の見方や世界全体への規範的姿勢（ラハヴが言う世界観）を表現していることを、彼女に分からせる一助となる。それらが表しているのは、何が善であり悪であるか、また正であり不正であるか、そして何が人生を有意味なものにし無意味なものにするか、等々の一般概念である。

これら核となる信念や拠り所や理想は、物事が現にどのようになっているとどのようになるべきかについての主張を表現する範囲では、哲学的探究に適している。彼女は、カウンセラーの助けを借りて、自分の人生の見方を裏付けてくれる事実に信念の真理性評価を決めようと努めることもできるし、自分の規範的信念の内なる論理やもっともらしさや相互一貫性を調べてみることもできる。

よって、自己を問うプロセスは、真理と理性的正当化に関する規範的問いを彼女

にさせるものである。彼女の探究は認識の戦略や明証基準を歪めるような恣意的主観的選好に駆り立てられたりせず、むしろ彼女が、自分の探究を、一致して支持されるような実践的哲学的な推論規範に従って、一層責任を負えて正当と認められる形になるように仕向けていくのである。

また、クライアントの探究は、自身単独での私的な自己表現主義的なものではない。これはお互いで共有された率直な真理追求の相向かい合った議論なのである。対話に参加する両者共に、ある共通の問いに動機づけられる。すなわち、本当のところ何が彼女にとって善いのか、より善いのか、最も善いのかという問いである。従って両者共に、ある共通の目標をもつ。すなわち、「私は誰で本当は何をしたいのか」という根本的実践的問いに答えを出す様々な方法のうちで、どれが最も真理に近いかを決めるという目標である。

例の医師の問題は、異なる自己概念、自己評価、自己描写の間の葛藤であると見なされるかもしれない。しかし、真理を追跡することは静止的な対象を追跡することではない。自己探究は、その対象と自己を変わらないままにしておくことではない。正確な自己評価と自己描写を組み立てる際に出てくる反省的自己関係は、それ自体が一種の自己への行為であるから、評価および描写の対象と評価する主体とは、一緒にそれぞれの領域を変え、広げていく。彼女が、狭く圧縮された自己概念から脱皮して自己探究を推し進めていくほど、探究すべきことがもっと出てくるだろう。というのも、哲学カウンセリングの流れの中でなされる反省的自己評価活動そのものが、彼女をかつてのあり方から変えてしまっているだろうから。

厳密に言うと、「私は誰で本当は何をしたいのか」という問いに答えを出す営みに終わりはない。また、自己についての一つの最終的包括的描写も、物理的对象物の完全な描写において想像されるであろうようには、存在しない。我々がここで語るのは、一種のフィードバック回路である。というのも、知識の獲得そのものがその知識の対象を変容させ作り変えるからである。

結論 真理追求への寄与は、心理学的カウンセリングとは区別される哲学カウンセリングの特徴の一つであるが、それは哲学カウンセリングが非指示的・判断留保的カウンセリングの倫理から離脱しているからである。普通は、療法士やカウンセラーはクライアントの個人的な決定や価値観に忠告や評価を振り向けるのは控える。道徳的な反応としての態度は心理療法上の対面では棚上げにされ、明晰で道徳抜きの理解が幅を利かす。

とはいえ、非指示的になるという倫理からの離脱は完全な指示的介入を行うことと同義ではない。真理を追跡することにおいて、哲学カウンセラーはクライアントに対して、強い道徳的な構えで説き伏せたり、ひとまとまりの真理を権威をもって渡してやったりする権限を与えられているわけではない。

このことを知るためには、指示的であることのいくつか異なる意味を区別しておくのが重要である。

a)強い非指示的なあり方：クライアントの推論様式や解釈術や明証的規範論理的選択に対すると同じく、彼の個人的な信念や選択や価値観に対する包括的中立の姿勢。

b)弱い非指示的なあり方：クライアントの個人的な信念や選択や価値観の明確な内容に対する中立の姿勢と、もう一方で、彼の見解の中にある、問題に関連する明証的規範論理的選択や推論様式や他の形式的特質（例えば、首尾一貫性、調和性、説明適切性、もっともらしさ）に対する哲学的な批判の姿勢。

c)弱い指示的なあり方：クライアントの見解の中にある全ての明証的、規範論理的、論理的、その他形式的な諸特徴に対すると同じく、彼の信念や選択や価値観の中にある事実的な内容と意味合いに対する哲学的な批判と評価の姿勢。

d)強い指示的なあり方：説得や談判や議論による介入への積極性と同じく、クライアントの信念や選択や価値観や推論方式や明証的規範論理的選択の全ての側面に対する哲学的な批判と評価の姿勢。

これら四つは、各々が自律か真理かの論争において異なる立場を表しているが、そのうちの b)と c)が真理志向的な哲学カウンセリングを表すものに最も近い。両者の場合とも目標は、真理に近づくことであり、その過程で虚偽や過誤や欺瞞を避けることである。言い換えれば、真理志向的な哲学カウンセリングは、安寧や治療効果や適応性や忠実な自己表現のために、真理を放棄したりしない。哲学者としてのカウンセラーは、例えば非現実的なまでに肯定的な自己評価や役立つ虚構の自己表現を奨励することで、クライアントの気分がよくなる手助けをするのが仕事ではない。

いかに生きるかを決定するのは、依然としてもっぱらクライアントの側である。哲学カウンセラーは牧師でも導師でも忠告の専門家でもない。どの決定が最善か、どの人生の道が最も意味あるか、どの価値観が身を委ねるに値するか、どの性格特性が道徳的価値があるかといったことを、クライアントに告げることはできないのである。しかし、どの願望が本当の動機づけになっているのか、どの信念が本当に土

台がしっかりしているのか、どの性格特性を本当のところもっているのかに関して、クライアントが正しい自己理解に達するのを手助けすることはできる。

自己を一層知るようになることは適応性を高める。我々が関心を向ける様々なものの中でどれがより永続的な意義を有するのかを、より明瞭に正確に正当に理解するよう努めることによって、我々は、本質的価値のないものを一時的に認めてしまうことによる日々の思考回路の揺らぎに抗する構えが、一層整う。哲学カウンセリングを通して一層自己を知るようになることは、我々により実践的な制御能力を与えてくれるのである。

従って、我々の本当のアイデンティティがかなりの程度我々には分かっているのが常だとすると、またそれについて、すなわち自分が誰で本当は何を望んでいて自分の人生が何にかかっているのかについて、間違った考えに陥りかねない方向がたくさんあるとすると、明らかに哲学カウンセラーは、クライアントが正確で正当で行動指針となる真理志向的な自己理解を達成するのに、その手助けをする重大な責任を背負っていくことになる。